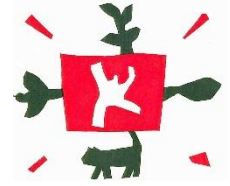


共同通信



2026年4月26日 355号(565号)

日本基督教団 西宮公会教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町10-22

TEL 0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email koudou@gamma.ocn.ne.jp

<http://koudou.jp/> 振替 01170-3-4901

To tell the story 254

説教「神と金」

マタイによる福音書第6章19～24節

- 19：マタイによる福音書/06章19節
「あなたがたは地上に富を積んでは
ならない。そこでは、虫が食った
り、さび付いたりするし、また、盗
人が忍び込んで盗み出したりする。
- 20：マタイによる福音書/06章20節
富は、天に積みなさい。そこでは、
虫が食うことも、さび付くこともな
く、また、盗人が忍び込むことも盗
み出すこともない。
- 21：マタイによる福音書/06章21節
あなたの富のあるところに、あなた
の心もあるのだ。」
- 22：マタイによる福音書/06章22節
「体のともし火は目である。目が澄ん
でいれば、あなたの全身が明るい
が、
- 23：マタイによる福音書/06章23節
濁っていれば、全身が暗い。だから
ら、あなたの中にある光が消えれ

ば、その暗さはどれほどであろ
う。」

- 24：マタイによる福音書/06章24節
「だれも、二人の主人に仕えること
はできない。一方を憎んで他方を愛
するか、一方に親しんで他方を軽ん
じるか、どちらかである。あなたが
たは、神と富とに仕えることはでき
ない。」

「あなたがたは地上に富を積んではなら
ない。・・・

富は、天に積みなさい。・・・

あなたの富のあるところに、あなたの
心もあるのだ。・・・

だれも、二人の主人に仕えることはで
きない。・・・

あなたがたは、神と富とに仕えること
はできない。」

このようにイエスキリストは、私たちに語りかけます。これは「山上の説教」あるいは「山上の垂訓」と呼ばれるイエス・キリストの語録にふくまれた言葉です。

山上の垂訓、そしてマタイ福音書全体は、旧約聖書の伝統的な律法を重視します。とりわけ律法の中心にある、十戒を重視します。

「だれも、二人の主人に仕えることはできない。・・・あなたがたは、神と富とに使えることはできない」という戒めもまた、モーセが神から授かった十戒をふまえています。

その十戒は、次のようにはじまります。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」

(出エジプト記 20 章 2 節～3 節)

この十戒について、宗教改革者のルターは次のように語っています¹。

「ひとりの神を持つということは、心が完全に信頼する何かを持っているということである。」「あなたの信仰と信頼が正しければ、あなたの神もまた正しい、だが信頼が間違っており正しくないとき

ろでは、正しい神もない。今あなたの心があり、あなたが信頼しているものが、実際にあなたの神である。」

ルターはこのように、『大教理問答』という信仰問答書の中で語っています。

「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」という戒めを聞くと、それは抑圧的な命令だと感じる人もいます。このような戒めは、服従や奴隷化を強制する命令ではないのか？ユダヤ教やキリスト教は、そのような強権的で抑圧的な一神教ではないのか？というわけです。

しかし、そうではありません。まったく、逆です。

目に見えない神に全幅の信頼を寄せる人は、目に見える人やモノを神格化したか、絶対化することを免れます。目に見える人やモノを神格化し絶対化することは、そのような人やモノが、こわれやすく、脆いものであることを見失うということです。これに対して、目に見えない永遠の神に信頼することは、目に見えるものは永遠に続くものではなく、移ろいゆくものだということを知ることです。また、目にみえるあらゆるものは、最終的なものではなく、絶えず未来に向かっ

¹ ルター『大教理問答』、1529年、

て開かれており、変化するものだ、という
ことを受け入れるということです。

さらにまた、そのような戒めを語る神
が、一体どのような神であるかが重要で
す。聖書の証言する神は、エジプトの奴
隷制によって虐げられてきたイスラエル
の人々を解放し、出エジプト、つまり
脱出の自由をもたらした神です。「わた
しは・・・あなたをエジプトの国、奴隷
の家から導き出した神である」という言
葉によって十戒が始まっているのは、そ
のためです。

さらに、ユダヤ人の歴史を描く旧約聖
書と、ユダヤ人イエス・キリストを主人
公とする新約聖書は、連続しています。
旧新訳聖書は、ひとりの神が、ユダヤ人
という小さな民族を通して、世界全体に
かかわる、ひとすじの歴史を証言するも
のです。旧約聖書において出エジプトを
もたらした神とは、新約聖書において
は、十字架につけられたイエスを死から
復活させ蘇らせる神です。出エジプトを
もたらす神は、命の復活をもたらす神で
もありません。

何よりもまず大きな解放の恵みが与え
られ、そのあとに戒めが語られます。そ
れを言い換えれば、福音が、まずはじめ
にあって、それに続いて律法が与えられ
ます。福音と律法は、別々のメッセージ
ではなく、ひとつのものです。律法の戒
めは、人間をしばりつけて不自由にする

戒めではなく、人間に自由と命をもたら
す戒めです。

II 金と神の類似

さてそれでは、「あなたがたは、神と
富とに仕えることはできない」と語られ
るのでしょうか？なぜわざわざ神と富
が、並べて語られるのでしょうか？

それは人間にとって、富が、神と見紛
うほど、強力に魅力的だからです。

富あるいは金をあらわす原語は「マ・
モ・ン」という言葉です。この「マ・
モ・ン」という言葉は、実は私たち誰も
が知っている「ア・メ・ン」という言葉
と関係しています。

「マ・モ・ン」という言葉と「ア・
メ・ン」という言葉は、実は古代の言葉
で、「信頼」とか「信用」とか「信仰」
を意味する、似た言葉どうしです。つま
り類義語、派生語どうしです。

わたしたちが礼拝で唱える「アーメ
ン」という言葉は、然り、その通りとい
う同意、信頼や信仰をあらわす言葉で
す。一方「マ・モ・ン」という言葉は、
人間が信頼を寄せる富や金や財産を意味
します。

ですから、信仰の対象となる神と、信
頼の対象となるマモンが並べて語られる
のは、決して偶然ではありません。ルタ
ーはこの「マモン」のことを「地上で最
も普遍的な偶像」だと言っているほどで
す。

ちなみに、わたしたちが礼拝でとなえる使
徒信条は、別名で「クレド」といい

ます。「クレドー」とは「我は天地の創り主、全能の神を信ず」という、使徒信条の冒頭の言葉に含まれた「われは信ず」という言葉です。「クレドー」とは私は信じる、I believe という意味の古い言葉です。この「クレドー」（私は信じる）という古い言葉から、私たち誰もが知っている「クレジット」という現代の言葉が出てきます。英語の Credit は、信用、信頼（例えば商取引の際の信用）、預金（額）といったことを意味します。

信用度の高いお金は、いたるところで求められ、また用いられます。世界でもっともひろく用いられる基軸通貨は、これまではアメリカのドルでした。そのアメリカの一ドル紙幣には、「(In God we trust) 私たちは神を信頼する」と、書かれています。キリスト教国アメリカならではの紙幣です。まるで「神の見えざる手」が、経済を巧みに調節して、人々に最もバランスよく恩恵をほどこす（利益を配分する）という、単純素朴な信仰が、この一ドル札に現れているようにも見えます。

お金は、至る所で流通して通用します。そのようなお金は人々の関係をダイナミックに広げて創り出します。お金は社会を活性化する血液のようなものです。

お金はもともと、物々交換の不便さを克服しようとして、人類が古くから創り

出してきました。古代に書かれた聖書にも、お金にまつわる話がたくさん登場します。聖書は、お金をたんに敵視したり蔑視したりして、禁欲主義をおしつける書物ではありません。

お金が流通していれば、ある時に何かを売ってお金をたくわえて、また別の時に、そのたくわえたお金で何かを買うことができます。つまり、お金を持つことで、買うことと売ることを別々の時に、別々の場所で、することができるようになります。売ることと買うことを分離できます。

しかしそのお金は、何とでも交換できるので、単なる交換のための便利な手段にとどまらず、人の欲しがる目的そのものへと変ります。そうすると、お金をたくわえることそれ自体が、生存や安全を確保することに役立ちます。お金それ自体をかきあつめて増やすことが社会的な力、権力になってきます。

不思議なことに、すべての動物にとって、すべての植物にとって、つまり人間以外のあらゆる生物にとって、人間がやりとりしている貨幣や紙幣は、何の価値もありません。「猫に小判」ということわざがあります。猫には小判のありがたみがわかりません。しかし小判をありがたがるのは、人間だけです。地球上で、人間という生物だけがお金を使います。人間だけが、お金がまるで命の源であるかのように、お金を崇めています。そして、お金がなければ生きて行かないよ

うな社会を自ら作り上げて、そこに自らを閉じ込めています。

そして今や、ありとあらゆるものが、残らず金に換算される、金にひれふす時代となりつつあります。金に換算できないもの、つまり利潤をもたらさないものは、非効率的で役に立たないものと見なされ、切り捨てられます。そのような競争の敗者となるものは、自己責任のレッテルをはられ、遠慮なく淘汰されます。最低限の生活補償や生存権さえ、切り捨てられつつあります。

「ブラック企業」「ブラックバイト」という言葉があります。ブラック大学、ブラック国家という言葉もあります。健康、安全、命さえもが金にひれふす。そのようなブラックな、暗黒の時代が、すでに社会を覆い尽くしつつあります。

フリージャーナリストの岩上安美氏は、昨年の末、霞が関のある官僚の次のような発言を報告しています。「うちの upper 層部はもう、戦争を覚悟しており、その方向へ進もうとしている」。「なぜか？」と岩上氏が質問すると、その官僚は即座に「一部の人は、儲かるから」と答えました。その官僚はさらにこう語り続けました。「秘密保護法を突破されたら、一気に呵成に憲法改正、そして集団的自衛権行使まで突き進む。そうなったら

間違いなく戦争になる。省内を見ても、他省を見ても、自分のように懸念している人間はたくさんいる。でも、上の方は戦争の方向へ進む気である・・・日本の財政はもうこんなに悪化している。戦争でもやって儲けるしかないと、本気で思っている」。

耳を疑うような発言です。しかしこれは五十代の官僚が、匿名でインタビューに応じたものです。

たとえ大多数の人々に貧困や死をもたらしても、ごく一部のものたちの利益を守るためには武器を売り、戦争の危機を演出し、国民の大多数の安全や健康を切り捨てる²。事態はそこまで切迫しています。

「地上に富を」無限に積み上げようとする経済成長は、すでに限界に直面しています。そのような経済の網の目は、国境を越え、国家を食い尽くし、人間を食い尽し、生態系を食い尽くそうとしています。現在の経済の規模をこれからも維持するためには、地球一個か二個分の星がなければ無理だとも言われます。経済はもはや、その語源である「経世済民」つまり「世を経め（おさめ）、民を済う（すくう）」ものではなく、世を破壊し民を切り捨てる暴力と化しています。

「地上に富を積む」生き方は、行き着くところまで行き着き、まさに虫に食わ

² 「戦争でもやって儲けるしかないと、本気で思っている」と言っているが、私にはそうは思えない。その程度の合理性すら欠いているように思うのだ。彼

らは、自分たちの嘘を誤魔化すため、ドクター・ロマンと同じように、国民を殺し、家に火を放とうとしているのだ。

れ、さびつき、盗人のごとく奪い合い、そして破局を迎える。わたしたちはそのような時代に生きています。

III 金と神の違い

そのような破滅的な時代において、聖書は私たちに何を教えるのでしょうか？「マ・モ・ン」と呼ばれる金と、「ア・メ・ン」と唱和される神との違いは一体何でしょうか？

信用の対象であるお金と、信仰の対象となる神との違いは、一体何でしょうか？決定的な違いがあります。

金は人間の信用や信頼が失われれば、一瞬にして紙くず、ただのモノとなります。政治が混乱したり国が弱体化すれば、その国の通貨価値は暴落します。お金は、人々がそれをお金だと認めている限りでしか、お金ではありません。

しかし聖書の神は、人間の信用や信頼が失われても、失われることはありません。

いやむしろ、あらゆる信頼が崩れ去ったところから、キリスト教の信仰は始まります。あらゆる希望が絶たれたところから、キリスト教の希望は始まります。

人間の側から神の高みへとよじのぼる、ありとあらゆる期待や希望が打ち砕かれる地点から、キリスト教の信仰は始まります。

イエスが十字架にかけられたゴルゴタの丘は、あらゆる信頼、あらゆる希望が打ち砕かれ、死に絶える場所です。

しかしそれは、地上に生きるわたしたちの側からはかけることができない架け橋が、天から地上に向かって、イエスの十字架によって、もたらされたということです。十字架のイエスに出会う人は、自分が神から捨てられていないことを知ります。あらゆる信頼が壊されても、壊されずに残る、確かな土台があることを知ります。

そこから新しい生き方がはじまります。それは、6章23節にあるように、それまで「濁って」いて「全身が暗」かったところで、体に灯がともされ、「目が澄んで」「全身が明るくなる」ような、新しい生き方への招きです。

IV 天に富みを積むような富の使い方とは？

それでは「地上に富を積む」のではなく、「天に富みを積む」ような生き方とは、どのような生き方でしょうか？

それは地上の富をあきらめて、仙人のような禁欲的生き方をする事なのでしょうか？

もちろんそのような禁欲的な清貧も、あり得るでしょう。実際イエスは、弟子達に対しては、家族と別れて、財産を放棄して、自らにつき従うよう呼びかけます。

しかしイエスは、身分の高い人々の宴会にも招かれています。圧政を行う外国人に協力している取税人たちからも招か

れています³。「あれは食をむさぼり、大酒をのみ、取税人や罪人の仲間だ」(マタイ 11,19) と、敬虔な人々からあざけられるほどです。

イエス自身は、身近な人々が財産を持つことをとやかく非難しません。身分の高い女性たちは、イエスに従い、その財産でイエスや弟子達を助けます。

それは、単に道徳的、単に禁欲的な生き方とは明らかに違う、どんなステレオタイプによっても説明がつかない、とらわれない生き方です。

イエスの態度はただ、天の国がまさに到来しようとしているという、全幅の信頼に基づいています。イエスの先駆者となった、洗礼者ヨハネの厳格な禁欲主義とは明らかに異なる生き方です。洗礼者ヨハネが恐れたような神の恐るべき審判ではなく、神の慈しみが圧倒的に勝っています。イエスは神のいつくしみこそが命を支えていると確信するがゆえに、日々を思い煩わずに「わたしたちの日々の糧をあたえたまえ」と祈ることを教えます。天の父の限りない慈しみを確信しているからこそ、何のものにもとらわれず、自分を防衛することがありません⁴。そしてそのような神の国の訪れを説くイエス御自身が、実は神から人間に与えられる、朽ち果てることのない富そのものとなります。

³・イエス自身は最貧困層ではない。手工業を営む、ガリラヤや地方の中産階級。弟子達も同じような社会階層出身。

⁴イエスは、財産それ自体正当か否か、財産は何故発生したか、財産はどう分ければよいかなどについて

それでは私たちにとって、「地上に富を積む」のではなく、天に富みを積むような生き方とは、具体的に、どのような生き方でしょうか？

ひとつヒントがあります。それはイエスに従った弟子達、十二人の使徒たちの生き方です。使徒言行録には、こんなことばが書かれています。

「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおの必要に応じて、みながそれを分け合った。」(使徒言行録二章四十七節)

これは、富を独占する生き方から、分かち合う生き方へ、奪い取り、けり落とす生き方から、与え合い分かち合う生き方への転換です。それは天の国の到来に応答する、贈与の生き方、互恵的な生き方への転換です。

これとは逆に、今日の格差社会は、格差によって分断された社会、つまり分かち合わない社会です。富める者は富を失うことを恐れ、富を奪われた者は孤立して社会を憎むようになります。つまり富を与え合わないこと、分かち合わないこと、人々が孤立していることこそが、本当の貧しさをもたらしています。

なにも新しい理論を作ろうとするつもりはありません。・・・なにものにもとらわれない態度を財産に向けています。神の国の到来によって、これらの事柄はすべて、事実上無力化しているからです。

そのような格差社会は、これからますます進む恐れがあります。無限の経済成長にしがみつけばしがみつくほど、それは勝者と敗者、格差の拡大というしわ寄せをもたらします。しかし有限の地球の上で、無限の経済成長をできるはずがありません。そのような夢を見ているのは、被造物の中で人間だけです。そして、現実を見ようとしないう人間社会は、遅かれ早かれ破局を迎えます。しかしその破局は、人間として、本当の意味で生き始めるためのチャンスであるようにも思われます。

私がドイツにいたころ、若者むけの讚美歌に、「神は私たちのために貧しくなられた」という題の歌がありました。私はその時、日本と縁を切るようにしてドイツにわたったばかりで、どん底まで落ち込んでいました。その時に、この「神は私たちのために貧しくなられた」という讚美歌に助けられました。その歌のリフレインを訳してみると、こんな歌です。

「神は私たちのために、貧しくなられた。
神は私たちのために、貧しくなられた。
神の貧しさによって、私たちが豊かになるために、神は私たちのために、貧しくなられた。」

こんな歌です。

神はキリストとなって、自らを貧しくし、低くし、十字架の死によって捨てら

れるところまで、与え尽くされたということを、この歌は歌っています。それは、地上の富に囚われている人間を目覚めさせ、天からふりそそいでいる無尽蔵の富に応じて生きるように、方向転換させる出来事です。

「あなたがたは神と富とに仕えることはできない」という言葉は、富を単に断念することを命じる道徳的な禁欲主義ではありません。それは、神という無尽蔵の財産、イエス・キリストという天から地上に与えられた富に出会う時、人が地上で用いる富の用い方も、変えられるということです。それは新しい生き方への招きです。それまで「濁って」いて「全身が暗」かったところが、体に灯がともされ、「目が澄んで」「全身が明るくなる」ような、新しい生き方への招きです。

共に祈りいたしましょう。

主よ、あなたの御言葉をあらたに聞く耳をお与えください。

あなたの大きいなる福音を受け止め、新たに歩み出すことができますように。

あなたが貧しくなられて私たちのところに来て下さったからこそ、私たちもまた自由になり、与える生き方、わかちあう生き方へと歩み出すことができますように。

イエスキリストのみ名を通して祈ります。

(福嶋 揚)

今月の畑だより

「園芸サークル」ということで活動を始めて、ほぼ1年になるにあたり、いくつかの事を確認させていただきます。

- ① 会員として、「登録」をお願いします。(下記の登録用紙の提出をお願いいたします)
会費：月 100 円 (月初に、集めさせていただきます。)
- ② 活動日時は、毎週火曜日 10 時～およそ 11 時 (雨天の場合は、中止)
- ③ 活動場所は、西宮市伏原町の西宮共同幼稚園の畑
- ④ 活動内容は、草抜き、季節の野菜などの植え付け、収穫、収穫物の配布、販売、また加工など
(配布については、地域の子ども食堂などへの提供。売上げは、諸活動資金。)
- ⑤ 毎月第4金曜日のみ、淡路島洲本市安乎町平安浦の「平安荘キャンプ場」内の畑、及びキャンプ場の整備など

*実施の場合、その週の火曜日(伏原町の畑の活動)は、お休みとなります。

*参加の場合、事前に連絡をください。
(0798-67-4691)

持ち物：お弁当、水筒、タオル

集合時間：朝 9 時に、西宮共同幼稚園

解散時間：夕方 4 時ごろ

参加費：500 円

伏原町の畑は、30 年以上も前から、その当時の幼稚園の保護者から「無償」でお借りして、今日に至っています。

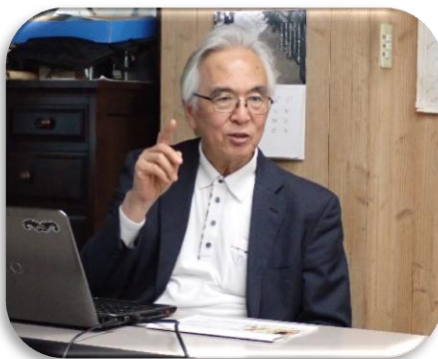
洲本市安乎(あいが)の海がすぐその平安荘キャンプ場は、日本基督教団兵庫教区の管理する場所です。数年前から、キャンプ場の一部を開墾し、畑として活用、また建物の管理なども担っています。



あんなこと こんなこと

2026年3月20日(金)18時～20時ごろ
関西神学塾 月本昭男先生 特別講座
「人類と福祉を考える 聖書以前の事例から」
西宮公会教会 集会室

月本昭男先生には、20日(金)、21日(土)の2日間連続で講座を開いていただきました。キリスト教史のその前の時代、文明の始まりとされるメソポタミアの文献にみられる社会、その社会がいわゆる障害者も仲間として受入れる社会であったこと、それらのことがイエスのキリスト教会にも伝えられ、生きられたことを広く古代の文献で紹介していただくことになりました。



2026年3月27日(金)18時～20時ごろ
関西神学塾 三浦耕吉郎先生 連続講座
「自然死(老衰)での看取りに随伴する様々な心の葛藤に、家族はどう向き合ってきたのか？」
西宮公会教会 集会室

自然の看取りをめざした三浦先生のご家族が遭遇した様々な葛藤を詳細に描くとともに、三浦先生ご家族がそれらとどのように向き合っていたのかをお話いただきました。

2026年4月5日(日)14時ごろ
イースター記念礼拝後のお墓参り
満池谷墓地

礼拝後、愛餐会でお食事を皆さんと一緒に囲んだあと、希望者で、満池谷墓地にお墓参りに出かけました。



デジタル化社会と高齢者の生きづらさ

私には 86 歳の父と 83 歳の母がおり、現在は二人で、大阪府泉佐野市で暮らしています。

二人とも特に大きな病気をしたこともなく、いくつか通院はしているようですが、施設に入らなければならないような状態ではなく、日々家庭菜園に励んでいます。とはいえ、世間一般からするとそれなりの年齢で、転倒して骨を折ったこともありますし、息子として気になることが増えつつあります。

そんなこともあり、この 3 年ほどは最低でも 2 か月に一度は帰省するようにしています。帰ったときに毎度聞かれるのは、スマホの使い方についてです。例えば、「メールがしょっちゅう来るんやけど、どうしたら消せるのか（迷惑メール）」や、「音を消したいけどどうしたらよいか（マナーモード）」といった、比較的初歩的な内容です。そして、「近くに住んでいたらいつでも聞けるんやけど、そうはいかへんから」と言うので、「分からないことはスマホに聞いたらええねん」と、Google 検索や Gemini の使い方を伝えるわけです。「昔、分からないことがあったら辞書を引くと教えられたのと同じように」。

私も決してデジタルに強い人間ではありませんが、父母を見ていると、このような高齢者が世の中にたくさんいるのだらうと思います。たまたま我が家の場合は最低限のことは私が教えられますが、

聞ける人がいない方はもっと大変だらうと思います。

父も母もまだ車の運転をしますから、買い物には困っていません。ちなみに母の乗る車は、今となっては貴重な MT 車で、さすがに今から AT 車に変えると危険なので、このまま乗り続けてもらうつもりです。私からすると、そろそろ免許返納も促すべきでしょうが、そうすると買い物に困ります。ネットスーパーの使い方も、そろそろ教えないといけなく考えています。タクシーに乗ろうと思っても、駅前の客待ちタクシーは本当に減りました。「自分で呼ばないと、いつまでたっても来ないよ」とも教えてあげないといけません。

さて、父母に教えている（つमりの）私でも、このデジタル化のスピードについていくのは必死で、少々疲れ気味です。どこかで「乗り遅れてはいけない」「デジタル格差が生活の格差にもつながるのではないか」という感覚があります。

自分たちの日々の生活においては、「早い・簡単・効率的」といえるシステムの恩恵を受けていることは間違いありません。しかし父母の話を聞くたびに、「この便利さは、すべての人にとって本当に便利なのだろうか」と考えさせられます。特に高齢者にとっては、この変化が必ずしもプラスに働いていない場面があると感ずますし、実際に父母も以前より生活しづらくなっていると言っています。それが進んで、外出することや諸々

の手続きが億劫になり、結果として孤立につながらないか危惧しますし、「できないこと」が増えることで自信を失わないかも心配しています。

このようなことを書きながら.....ちょうど、前回帰省した翌日の月曜日、通勤時の出来事です。

JR の改札を入ろうと IC カード (SMART ICOCA) を鞆から取り出そうとしたら、ありません。よくよく考えると、通勤とは異なる鞆で帰省していたため、入れ替えるのを忘れていたようです。

さあ、そこからが大変です。IC カードはそれだけをパスケースに入れており、幸い財布はありましたので、まずは現金で切符を買うことから。現金で切符を買うなど、何年ぶりでしょうか。券売機の上にある路線図を見て値段を調べます (毎日通勤で使っている区間の料金など、あまり意識していないので覚えていません.....)。

券売機の台数も減っていることは、この数年薄々感じていましたが、自分事となると本当に大変です。切符を買い、改札を入ろうとすると IC 専用だったため、人の流れを引き返し、別の改札を通るといった具合でした。

自分だけがアナログ人間になった気分で、大げさかもしれませんが「デジタル格差」を体感した時間となりました。

そのことを職場で話すと、若い職員から「なぜ、モバイル ICOCA にしていな

いのですか？」と尋ねられました。JR 西日本が SMART ICOCA を 2024 年 12 月に新規発行を終了し、2026 年から順次機能縮小することは知っていたので、いずれモバイル ICOCA に変更しようとは思っていました。しかし、どこか頭の中に「何もかもスマホに入れるのは嫌だな」「多少アナログのものも残しておいた方が良いのではないか」といった考えがあり、先送りしていました。しかし、この考えすら時代は待ってくれないようです。

(ちなみに、この 4 月に定期を購入するタイミングで SMART ICOCA はきっぱりやめ、モバイル ICOCA に移行しました.....。) いやあ、本当に何が良いのかよく分かりません。

デジタル化の流れは、これからも止まることはないでしょうが、その中で忘れてはならないのは、「誰一人取り残さない」という視点だと思うのです。便利さを追求するだけでなく、人へのやさしさも同時に進化させていくこと。それが、これからの社会に求められているのではないのでしょうか。これは何も高齢者に向けたことではありません。

スーパーのレジで現金を出すのに時間がかかっている人、バスで下車する際に現金を両替する人、駅のホームで困っていきそうな人 (そもそもスマホばかり見ていて気付かないか)、このような人を見かけた際に自分はどう感じ、どう関わるか。私の場合は、これがもし自分の父や

母だったらと考えるようにしています。

つい自分の父母には偉そうに言いがちな自分を省みつつ、丁寧に教えること、急がせないこと、できないことを責めないこと、一緒に操作しながら少しずつ慣れてもらうことを、根気よく続けていこうと思います。

最後に、高齢者すべてがデジタルに弱いとは思っていない、ということを申し添えておきます。

(古谷 佳之)



藤

福島東電の事故 そこから考える

原発事故は未必の故意の犯罪

～石丸小四郎さんのお話から①

先月 13 日、西宮公同教会からお声かけいただき、神学塾で福島原発事故について報告をさせていただきました。貴重な機会を提供していただき、心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

ロシナンテ社では、2011 年 3 月から「月刊むすぶ」で福島、原発事故について取り上げてきました。この雑誌の前身「月刊地域闘争」は 1970 年夏に創刊されました。住民運動の発信のお手伝いをするための媒体でした。その根っこに当時、各地に建設され始めていた原発建設に反対する住民や研究者のネットワークがありました。

2011 年 3 月 11 日、福島第一原発事故。私自身、2011 年 3 月から 2024 年 1 月と毎月のように福島県を訪ねていました。

福島県へ通い出したころ、お話を伺った方に石丸小四郎さんがいます。元郵便局員。富岡町に住んでいました。

反対運動が始まって半世紀

石丸です。私は 1964 年東京オリンピックのときに福島の人間になりました。私の住むところは福島第一原発から 6 キロ、第二原発から 3 キロのところに 49 年近く住んでいます。移り住んだ頃、まだ原発のうわさはありませんでした。あそこ

は飛行場跡地でした。茫漠たる原野でした。迷い込むと戻ってこられないと感じさせるほど、広々としていました。

そのほとんどを西武財閥の堤康次郎さんが所有していました。私どもが原発建設を知ったときには土地交渉が九分九厘出来上がっていました。その状況で原発建設が始まりました。

私たちは何が何だかわからないままに過ごしていました。そうこうするうちに第二原発、浪江小高原原発建設問題が起きました。1972 年に双葉地方原発反対同盟が結成されました。

原発の建設は着手されてきた、そしていずれは大変な事態に立ち至るであろう、それを何としても阻止したいというのが趣旨でした。

運転が始まったのは 1971 年でした。第一原発は、アメリカの実験炉を使わせられていると私たちは聞いておりました。なぜかという、第一原発の運転が始まって間もなく、緊急停止が繰り返されていました。それから次に目立ったのはピンホールでした。燃料被覆管に穴が開く、亀裂が入る。そうすると放射能がもろに建屋内に漏れ出る。また排気口から放出されるという状況の中で何が起きたかといいますと、1971 年から周辺の被曝線量がじわじわと高まり、1976 年、その当時としてはピークになりました。まだ原発が動き出して 3 年しかたっていませんでした。

原発被曝労働者の実態

私どもの地域は農村地帯です。太平洋から阿武隈山系まで 20 キロ弱の狭い地域に田んぼを中心にした農地がある、半農半漁の町でした。

農民の方々が出稼ぎの必要がないということで原発の仕事に通い始め、いわき市ではちょうど常磐炭鉱が閉山したときでした。ここの離職者が原発で働くという労働構造になっていたのです。東京電力を頂点にして三角形のピラミッド状態になりました。こういう状況の中、ばたばたと労働者が倒れるという訳のわからない状況になっていったわけです。

このようなことがだいぶ続き、1980年代に入ってから、原発はやばいというわさがぱっと広がりました。私たちも非常に深刻な思いを抱き、このままにしておけないということで、大阪の阪南中央病院の先生と私どもの反対同盟が協議をして、原発労働者の被曝労働実態調査、生活健康実態調査を全国をまたにかけ、芋づる式に当たりました。300人に当たり、回答をいただいたのは100名でした。

それをまとめたのが1982年に出した「福島原発被曝労働者の実態」というものです。その調査活動によって明らかになったことをもとに原発被曝労働者と原爆被曝者との健康をグラフにしました。そうしますと大変類似した疾病疾患が確認されました。特に免疫系の疾患が多い。体がだるい、それから風邪をひきやすい、立ちくらみをする、倦怠感がある。私は嫌いな表現ですが、原爆ぶらぶら病とい

う表現と類似した疾患が見られました。さらに有病率が異常に高い。

本来であれば原発に入るといのは、健康診断をして、どこにも異常がないという人が入るべきシステムになっているわけです。それが2年、3年と経つにつれ、非常に重篤な状況に陥る人も出て来るのです。これは明確に原発の被曝労働であるという指摘をしたのは、間違いでないと確信しました。

そうしましたら今から30年前に原発の資金で作った福島環境研究所というのがあるのですが、このお医者さんが原発下請け労働者の血液サンプルを採って、一般の人と比較しました。染色体異常が2倍から6倍ありました。当時10レム、現在の100ミリシーベルトですが、非常に厳しい染色体異常が見つかるという状況でした。私たちは放射線被曝労働の危険性を告発してきました。

被曝労働者で労災認定を勝ち取ったのは全国で10件です。そのうち私はこれまでに4件、関わっています。福島原発は全国の総被曝線量の40%を占めています。福島原発で被曝しているということの反映が原発労働者の労災認定数に明確に現れています。

それから原発内労働というの、今もちろんですが、以前から非常に差別的でそれから理不尽、不条理なことが多すぎる職場です。自らの健康を害することは労働の中でありうることで、自分の子ども、家族まで健康被害を与えるのではないかという特殊な労働をさせられ

ています。

(つづく)

※「月刊むすぶ」No.499 (2012年8月号)より

(四方 哲)

※ロシナンテ社では、福島は今、原発問題について、PDF版「ロシナンテ通信」をインターネット配信しています。

年間購読代 3600円 お申込みをよろしくお願いたします。shikatasatoshi@gmail.com

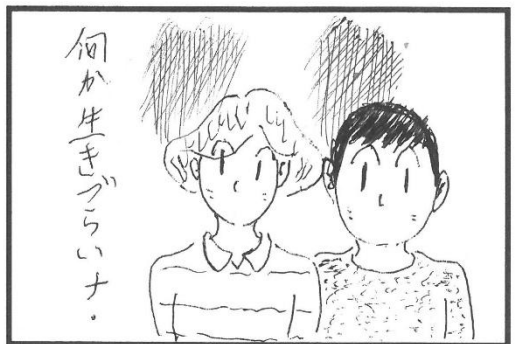
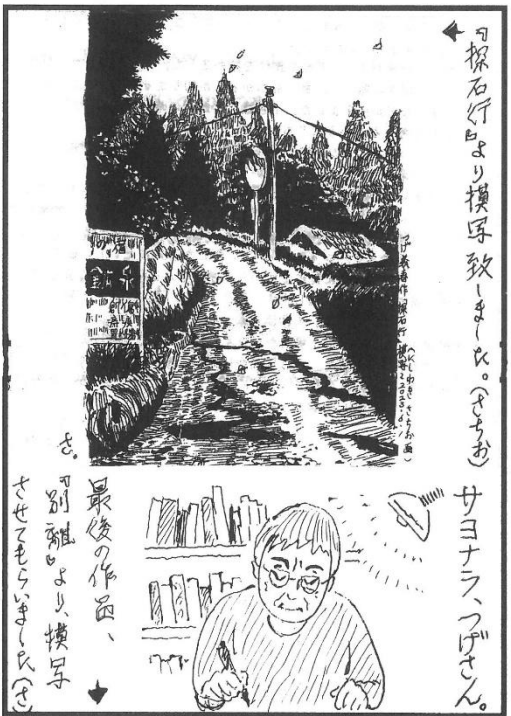


レモン

ついでに義春さん、安らかに



なんだからね...



参考:『義男の青春/別離』ついで義春著(平成10年/新潮社)。

3/30 朝日新聞 朝刊〜引用しました。

～♪ぼくのみる空と きみのみる空は
つながっているから～

名護七曲（155）

「解脱」

まず、国語辞典は4つも要らんやろうという話ですが、(前回の続きね)その内の2冊はこどもたちが学校で使っていたもの。ほぼ新品。残りの2冊は私が小学校入学の時に伯父様から頂いたものと、高校生の時に自分で買ったもので、かなりの年代物。年代も出版社もそれぞれなので一応比較用ということで手元に残してあります▼漢字辞典や英和・和英の類も、こどもたちが置いてったものを含めて複数冊。一方仕事で使うはずのギリシャ語やラテン語、英語の語義語源辞典は各1冊のみ。確か大学生の時必須だったドイツ語の辞書もどこかにあるはずなんですけど、卒業してからほとんど出番なし▼実はわたくし、字ばっかりの分厚い本や、長尺の物語を読むのが少し苦手で、それは牧師としてはかなり致命的だと思うんだけど、聖書はともかく、辞書を読むのはわりと好きで、一度開くとそのまま読みふけてしまうこともしばしば。マニアではないので通読は一度もしたことがないのですが、刊行に携わった先生たちが心血を注いで一所懸命考えたであろう語釈とか用例とかを見て、フッフッってなりながら一人で楽しんでいます。ちなみにマニアの語源はギリシャ語の mania (狂気) だそうです。日本語の

「マニア」のように人を指す場合は英語では maniac 乃至 enthusiast と言うのだそうです。enthusiasm (熱狂) の語源はこれまたギリシャ語の enthousiamos から来ておるようで、これは theos (神) が en (入った≒とり憑いた) 人のことらしいです。面白いですね▼何の話をしてたかと言いますと、そうそう前回に引き続き「部屋が片付かない」というお話であります。あれからひと月、お部屋は頑張っている程度は片付けたのですが、デスクトップとその周辺が相変わらずのカオス。これって不思議なことに、何度片付けてもまたすぐに元に戻ってしまうのですね。片付けた状態が「元」なのか、はたまたこの取り散らかっている状態が「元」なのか、もうなんだかよく分からなくなってきました▼物事は一般に秩序から無秩序へ向けて不可逆的に進行する—という噂を聞いたことがあります。部屋が片付かないのも結局はそういう理屈なのかもしれませんね。そう、この混沌とした書齋は、もはや人が抗うことのできない永遠の法により支配された一つの宇宙。全宇宙を決定づける不変の法と同じ法則により、この部屋も完全に統治されているのです! ...ちょっと待って、もしかしたらわたし、ついに宇宙の根本原理に到達しちゃったかもなんですけど。

(羽柴 禎)

つとかいわ・あれこれ

「読書会」のご案内

2026年4月
西宮公会堂

毎月、第3火曜日（ほぼ！）の午後1時～3時まで、西宮公会堂の「読書会」の時間です。選んでいる本のうちの1冊は、ハンス・キュンクの「イエス」（訳：福嶋 揚／ヘウレーカ、2024年）で、2～3年、たっぷり時間をかけて読む予定です。

「イエス」とは別に、その時々、話題になっている本、絵本なども読みます。

4月は、奈倉有里の「背表紙の学校」（講談社、2026年3月）と、バーバラ・クーニーの一生涯を絵本でつづる「世界をもっとうつくしく」（著：アンジェラ・パーク・クンケル／ほるぷ出版、2025年）でした。



これまでには、旧約聖書のサムエル記を延々と輪読したこともあれば、ここ2、3年では、レベッカ・ソルニットの「オーウェルの薔薇」（著：レベッカ・ソルニット、訳：川端康雄、ハーン小路 恭子／岩波書店、2022年）、志村ふくみの「野の果て」（岩波書店、2023年）、松岡享子の「ランプシェード」（東京子ども図書館、2023年）、現在は、ハンス・キュンクの「イエス」で、たっぷり時間をかけて読むことになっています。

この場合「イエス」だけではなく、バーバラ・クーニーの絵本「ちいさな曲芸師パーナビー」（訳：末盛千枝子／現代企画室、2016年）を合わせて読んだりしています。

直近の4月14日（火）は、「イエス」と、奈倉有里の「背表紙の学校」の紹介になりました。

以下、「背表紙の学校」について。



角田光代の新聞の書評（2026年4月11日、毎日新聞）の一言一言が気になって…たとえば「私にとって今、本書は真に必要な一冊だった」で、「背表紙の学校」（奈倉有里、講談社）を読み始めることになりました。書評の「…やわらかい語りかけるような文体…気を抜いて読んでしまう」が、「…だが、だんだん、じょじょに、この一冊にこめられた文体とは裏腹の、とてつもなく激しく熱い思いに気づかされる」の、角田光代の思いに、近づいているのに気付か始めています。

「背表紙の学校」の7番目の文章は「落葉注意」です。冒頭に紹介されているのが「ソ連の女性詩人オルガ・ベルギーリツの1939年の詩」です。

秋だ 秋だ！ モスクワの空に
鶴と 雲と 煙霧がたゆたい
しずんだ黄金色の 木の葉で
公園は 燃えたつ
並木道の 看板は
道ゆく 人まみなに
独り身にも 二人組にも
「落ち葉注意！」と呼びかける

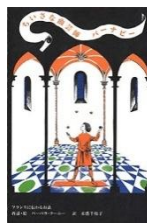
詩は、4連、5連と続きます。「なぜ、この詩は『喪失』したあとにまで『注意』を呼びかけるのか」「そう考えたときに、ただならぬ存在感を放つのが、1939年という制作年…」

そのことについて言及。

「それはいわゆる粛清の時代だ。そしてベルギーリツの最初の夫は1938年2月に銃殺されており、彼女自身は前年に尋問を受けていた。そのときベルギーリツは妊娠後期にあったが、厳しい尋問の末に病院に運ばれ死産している。1938年内に彼女はいったん無罪となるものの、12月にはまたもや逮捕されている」

「字面だけ追えばまるで淡い恋と別れの詩のようにも思えるが」「…落ちていく葉ははらはらと際限なく落ちていく命なのではないのか」「ソ連時代を生きた詩人は多かれ少なかれそのような、テーマ性を行間に隠した詩を書くこと／読むことに長けていた」「ソ連崩壊後はそのような詩は息をひそめたかみにえたが…1960年代のソ連で一世を風靡した詩人エフゲーニー・エフトゥシェンコが書いた詩「まだ救える」を読んだとき、ふとそうした文化を思い起こした」（以上「背表紙の学校」より）。

ここで突然「ソ連で一世を風靡した」エフトゥシェンコは、1970年前後に、スペインのロルカの詩集



と、数少ない詩の本として手元にあつて、ながめていた記憶があります。数年前に、それが消えているのが解り、捜してもらったら見つかったので購入してもらいました。20 世紀の人だったエフトゥシェンコが、21 世紀になっても詩の仕事をしていて、それが紹介・言及されていたのです。

中傷は 狂気のように
すべてを 吹き飛ばしてしまう
けれども まだ救える
その中傷を 信じなければ

…で始まるエフトゥシェンコが書いた「まだ救える」(2009年)の第6連は次のようになっています。

無関心という 復讐はするな
憎しみは 僕らを破壊する
けれども まだ救える
僕らがどちらも 生きていれば

ここで、まだ救えるとエフトゥシェンコが書いている 2009 年から 5 年後の、2014 年に、プーチンのロシアはクリミアを併合、更に、2017 年にエフトゥシェンコが亡くなった後の 2022 年 2 月に、プーチンのロシアはウクライナに侵攻し、その戦争は、世界を巻き込むこととなります。

エフトゥシェンコの「まだ救える」に、言わば「無関心」だった世界に対する、プーチンのロシアによる「回答」です。しかし、それは、世界を巻き込むという意味では、「無関心という 復讐はするな」に対する、回答でなくはないのです。

奈倉有里が、50 年の歴史をつないで、エフトゥシェンコに言及するのは、プーチンのロシアのウクライナ侵攻があつて、2023 年のネタニヤフのイスラエルによる、パレスチナ・ガザに対する戦争、更に、「背表紙の学校」が発行された 10 日後の、ネタニヤフ・トランプによるイランに対する戦争は、「無関心という 復讐はするな」と「地続き」であることの示唆であるように思えます。

角田光代の書評のタイトルになっている『もし僕らが賢くあれば』の思いは、引用のエフトゥシェンコの詩の一節です。

そして、書評の最後の「…私にとって、今、本書は真に必要な一冊だった」は、ウクライナ、パレスチナ・ガザ、そしてイランのことであると同時に、「私が、私が」という言葉に魅了されて投票する、この国の私たちの問題であることの示唆なのです。

(K)

4 月になりました。春の花がいつべんに咲き揃い、華やいだ気持ちに誘われています。そして、春の美味しい野菜もたくさん出回って、目も口も楽しませてくれる季節です。

私は、年にたった 1 回しか料理しないこの時期の野菜があります。それは、「葉ごぼう」です。もう下処理が、大変なんです。下処理といっても、水でよく洗うことなんですけど。根っこには泥がついているので、まず外の水道であらかた落とし、家の台所に持ち込みます。それから葉と茎、根の部分を切り分けて、タワシも動員して、更に、もう一度丁寧に洗います。洗うだけで、20~30 分かかります。それから、葉の部分は茹でて、細かく刻み、ふき味噌のように仕上げます。茎は、根っこの部分と斜め切りにして、油で炒め、おあげさんと一緒に薄味で炊きます。

春をいっぱいを感じる、これぞ“おふくろの味”です。

私こそ、おふくろなんだけど…、ほんとは、ひげ根も、よく洗って、唐揚げにするとおいしいのですが、今回は、おふくろさんも寄る年波で、そこまでの気力がありませんでした。

(S)

4 月から、自転車の交通違反に青切符が導入されました。スマホを見ながらの運転や信号無視が危ないことは分かっていたけれど、傘さし運転もダメになるのかと知って、少しどうしようかな…と思っていました。

雨の日の通勤は、どうしても濡れるのが気になってしまふ。けれど、これからはそうも言っていられないと思ひ、一応、何かの時にと持っていたカッパを着て出かけてみました。いざ走ってみると、顔や手足はやっぱり濡れてしまふ、決して快適とは言えません。それでも、両手でハンドルを握れる安心感と、ふらつかない安定感、思っていた以上に心強かった。少しくらい濡れても、タオルで拭けばなんとかなる！そう思えると、なんだか気持ちも軽くなって、これから来る梅雨の時期も、バッチリ乗り越えられそうな気がしています。

冬は少し寒そうだけれど、これからは、自分の身を守り、周りの人たちのことを大切にしながら、日々の道を進んでいけたらと思います。

(K)